

研究と実務をつなぐ視点—キーリー・アレクサンダー・竜太さん—



研究や実務活動を詳しく説明してくださったキーリー・アレクサンダー・竜太さん＝Zoom画面のキャプチャ

2018年度に学位を取得し、総合生存学館（思修館）を修了したキーリー・アレクサンダー・竜太さん。同年から九州大学工学研究院の馬奈木俊介研究室で特任助教、2020年からは助教として活動している。馬奈木教授がノーベル経済学賞を受賞した故ケネス・アローらと開発した国連の新国富指標（Inclusive Wealth Index）に関して、馬奈木教授とともに政策実装の課題解決に取り組む。また、エネルギー技術の持続可能性評価に係る研究や、環境社会ガバナンスを考慮した投資（ESG投資）に関連して、企業活動の影響分析やESG指標化を実施し、持続可能性を考慮した企業・技術への投資を促進する研究などを行っている。さらに、アジアで事業を展開する有力なPR企業の株式会社ベクトルと共同で、ESGスコアを社会に導入していくプロジェクトを立ち上げたところだ。

企業、世界、国連などの異なるレベルのステークホルダーを俯瞰し、どのレベルでは何が必要かを考えて研究を活かす、研究・実装化プロジェクトをリードして推進する、そんな能力を伸ばしつつあるリーキーさん。大学院での研究、その他の学びはどのようなものだったのだろうか。

学部時代は九州大学で環境経済学を広く学び、2011年の東日本大震災もありエネルギー問題に関心を抱いたという。大学院での研究テーマとなる再生可能エネルギーを強くやりたいと思ったのは、総合生存学館に入学して、同じ京都大学の経済学研究科に植田和弘先生がいらっしゃったためだ。植田先生に指導委託をお願いし、研究を行った。「とくに途上国において再生可能エネルギーを普及させるために、何が阻害要因になっていて、何が促進要因になっているのか、定性、定量、両方の手法を用いながら詳細に見ていったというのが博士論文です」。思修館のカリキュラムを踏まえると最初の2年のうちに1本は論文を出さなければならないだろうと思い、実際に論文を書き国際ジャーナルにアクセプトされた。その後は博士論文の内容となる論文を書き進め、大学院修了までに合計7本の論文がジャーナルに掲載された。

机にしがみついていたわけではない。インドネシア、トンガ、バングラデシュで現地調査も実施した。とくにインドネシアは博士課程が終わるまで何度も訪問した。省庁関係者は人に紹介してもらったこともあったが、ディベロッパー関係者はすべてキーリーさんが直接連絡を取って調査の協力を依頼した。インドネシアの国営電力会社PLNにも、「京大の名刺を持って行って、こういう研究をやっていますって説明して、明日から3日間のどこかで時間をつくってもらえませんか、飛び込みでアポを取りました」。

大学院時代に申し分のない研究経験と成果を積んだといえるが、キーリーさんを真に特徴付ける学術界の外の視点に最初に気づいたのは、4年次の海外武者修行で国際エネルギー機関（IEA）と国連開発計画（UNDP）でインターンシップを行った時だった【レポート 2016年度武者修行（2）】。「より実社会、市場をイメージして行われている分析や提言と、学術の研究者が行っている研究はズレがあって、もちろん国際機関は政治的な影響を受けているというのもあるんですけど、それを踏まえてもやっぱりズレが起きてしまっているのは強く感じたんですね」。

さらに、5年次のProject Based Research（PBR）では、再生可能エネルギー関連会社の創業に共同設立者として携わり、建築会社や資金調達、銀行、行政、地元の住民などさまざまなプレーヤー、ステークホルダーとともに再生可能エネルギーを導入した。「ものすごくたくさん許認可を取らなきゃならないんです。場所にもよるけど日本では10個前後が必要になってくるんですよ。いろいろな人との交渉であったり、ファイナンスをどうするかだったり、いろんな課題があったんですよ。それが学術の文献では十分に反映されてないっていうのを感じたんです」。研究対象のインドネシアでもおよそ14個の認許可が必要だという。

研究を進めながら、国際機関や実務との接点をつくる機会が設けられていた思修館のカリキュラムはキーリーさんにとって最適なものだった。「そこから見えてきた、新しい情報であったり、知見であったり、課題であったりを自分の研究や実務活動に活かしていくというのが思修館から得られた大きな恩恵だったと思います」。研究を実務でどう活かせるか常に意識できるようになったという。思修館はいかに自分の研究を噛み砕いて社会に向けて発表するかの練習の場でもあった。「いろんな学生がいて、自分の研究を伝える機会がたくさんあったんです」。ちなみに、生まれがアメリカで、小学校の時に日本に来たキーリーさんは、日本語、英語とも不自由がない。留学生とは英語で話すことが多かったが、留学生同士が言語面で高め合っていこうと日本語で話す期間をつくったときには、その環境づくりにも参加した。

では、そもそも思修館を志望した動機はどのようなものだったのだろうか。「博士の期間は、迷ったり、立ち止まったりするものだから聞いてたんですけど、私はそうじゃなくていいと思って。どんどん、どんどんいろいろなところに出て行って、立ち止まるんじゃなくて、視野を広げて行って、そこから解決できるものはあるだろうって」。現在もその言葉そのままに、持続可能性を考慮した企業活動の促進、エネルギー技術の普及に向けて、研究と実務をつなぐさまざまな挑戦を続けている。

聞き手 小泉都、2021年8月13日インタビュー